

虐待・ネグレクトの予防と早期発見に向けた研究・実践

掛札逸美(1), 西田佳史(1), 本村陽一(1), 北村光司(1), 山中龍宏(1,2)
1:産業技術総合研究所, 2:緑園こどもクリニック



総論 虐待・ネグレクトの予防と早期発見

現状 ⇄ CIPECのアプローチ

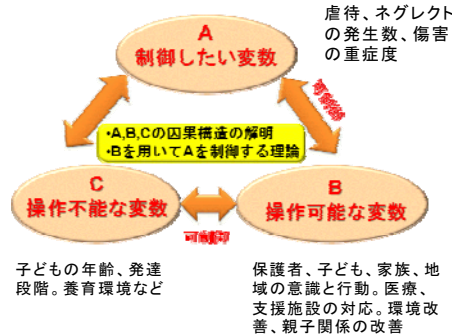
虐待・ネグレクト等の意図的(故意による)傷害を予防し、早期発見するための取り組みは各地で進められている(厚生労働省の研究班報告、山田のレビュー[2000]など)。これら取り組みや研究の検討から見えるのは、次のような現状である。

早期発見・予防の効果的方法がない

虐待・ネグレクトのハイ・リスク群を同定する努力に注力(相関研究であって、因果関係を同定する前向き研究ではない)
例)子どもの側の要因(未熟児、発達遅滞等)
養育環境(ひとり親、未婚、地域での孤立等)
養育者の状況(育児不安、感情・情緒不安定)

こうした要因の大部分は、介入によって直接変えること(「制御」)が不可能→予防につながりにくい

スクリーニング指標として有用? → Sensitivity, specificityは不明(拾い過ぎ? 見落とし?)



介入(制御)可能な変数へのはたらきかけ

BIS(全身体表、口腔、頭部等)を用いた早期発見支援「ハイ・リスク群」にこだわらず、親一般、地域全体を対象に予防を進める

検討課題

乳児の泣き声の質と受け手の感情的反応の関係

子どもに対する暴力や虐待がニュースなどに取り上げられる際、多く聞かれる理由のひとつに「子どもの泣き声にいらした」「泣きやまないで、つかうた」とある。虐待・暴力の責任を子どもの特性に帰することは決してすべきではない(Sheridan, 2004)。しかし、子どもの泣き声と、それに対する親および大人全般の反応について理解することは、親・大人に対する虐待・暴力予防の教育・介入を計画し、展開する上で資するであろう。

研究プロトコル

これまでの知見(右表)などに基づき、日本人の親・大人の、乳児の泣き声に対する感情的反応を検討する。

- 異なる声質の乳児の泣き声を録音で用意する。
- 泣き声に対する感情的反応を測定するための質問票を用意する。
- 録音の泣き声を実験参加者に聞かせ、各種の声質に対して感情的反応を測定する。
- 泣き声の質と実験参加者の感情的反応、実験参加者の属性・特性との相関を検討する。(実験参加者の属性・特性は、性別、年齢、子どもの有無、人格特性、怒りの感情を持ちやすいかどうか[Aggression]など。)



泣き声の質と聞き手の感じ方の関係(知見の一部)

- 泣き声の周波数(または、話声位の周波数、fundamental frequency)がより上昇する
→ 嫌悪感、怒り、困惑、緊迫感、苦痛などの感情が上昇する
- 泣き声の周波数の変化が大きいの
→ 嫌悪感、怒り、困惑、緊迫感、苦痛などの感情が上昇する
- 泣き声・呼吸の間の間隔が広がる
→ なにかおかしい(普通ではない)、泣く理由がわかりにくい、苦痛、緊迫感などの感情が上昇する

泣き声に対する感じ方を左右する因子(知見の一部)

- 性別: 男性は女性に比べ、泣き声に嫌悪をより感じ、子どもが甘やかされていると感じる
- 母親が「手に負えない感(learned helplessness)を感じている場合: そうでない場合に比べ、泣き声に対して鈍い(やる気のない)心理的・行動的反応を示す
- 母親のうつ状態: 泣き声の周波数の変化に対して反応が鈍く、世話を焼く行動に出にくい
- 泣いている理由を理解している: 理解していない場合に比べると、泣き声に苦痛を感じながらも、すぐには世話を焼かない

(LaGasseらのレビュー、2005)

検討課題

暴力・虐待予防のためのプログラム開発・応用

暴力・虐待が子どもの心身に及ぼす短期・長期的影響は大きく、暴力・虐待が起こってから対処したのでは遅い。予防的対策が求められているものの、いわゆるハイ・リスク群を抽出する現行の手法は、拾い過ぎ・見落とし両方の問題を抱えている。う

子どもに対する暴力・虐待は、育児ストレス等を引き金として誰もが起こしうるものであり、「特別な親」に限った問題ではない。一方で、子どもに対する暴力・虐待は多くの場合、恋人や配偶者など、子ども以外の対象に対する暴力、あるいは人間関係全般における困難を伴う。

こうした点を考慮に入れると、親になる前になんらかの教育を行い、予想される育児ストレスや、怒りの感情の爆発に対処する具体的な方法、問題が起きた時に支援を求めることの重要性を伝えておくことが重要である。また、子どもに暴力をふるいそうになってしまった、あるいはふるってしまった親を対象にした行動変容プログラムも必須である。

欧米でこれまでに開発・応用され、効果評価がなされてきた手法に学び、わが国に合ったプログラムを開発し、現場で応用することが必要である。

プログラムの例: 親になるための教育、怒り感情コントロール・トレーニング

親になるための教育では...

- 子どもの成長・発達に関する情報を提供
- 子どもの行動に対し、ネガティブな解釈をしないようにする(例:「子どもが泣く→親として落第」ではなく、「子どもが泣く→発達の一段階」)
- 単なる知識としてではなく、もの見方を変え、行動を変えるトレーニング
- 一方的な教育ではなく、参加型のトレーニング

怒り感情コントロール・トレーニングでは...

- 子育ての場に限らず、怒り感情の爆発や行動(怒鳴る、暴力をふるう)などをコントロールするためのトレーニングを行う
- たとえば、開発されている親用キットでは、カットとなる状況を疑似体験し、暴力などに訴えることなく、どのように子どもとコミュニケーションすればよいかを学ぶ

研究プロトコル

- 文献研究により、一定の評価が得られているプログラムを選定する。プログラム例は:
 - 第一子を持つ前の夫婦を対象にした、「親になるための教育」、ストレス対処法、および問題解決スキルのトレーニング
 - 10~20代を対象にした「怒りの感情コントロール」トレーニング
- 日本における実行可能性、有効性を測るためのパイロット・テストを、小人数のグループを対象に実施する(実験室レベル)。
- 上の結果をもとに、実施マニュアル等を作成し、実地応用のための対象グループを募集する。対象の例は:
 - 地域の保健センターなどで実施する、夫婦を対象にした育児プログラムの受講者
 - 大学生(「怒りの感情コントロール」)